



古市公威の偉き
一九二五年一月四日
平岡梓の
長男として生まれた。そうして、お七夜の晩に祖父の平岡定太郎
が、公威と命名した。梓は『伴・三島由紀夫』（昭和四七年五月・
文藝春秋刊）で次のように記している。

古市公威の偉き

金関 義則

三島由紀夫は一九二五年（大正一四年）一月一四日、平岡梓の
長男として生まれた。そうして、お七夜の晩に祖父の平岡定太郎
が、公威と命名した。梓は『伴・三島由紀夫』（昭和四七年五月・
文藝春秋刊）で次のように記している。

公威という名前は、僕の父の恩人で当時造船界の大御所であった古市
公威先生のお名前を、頂戴したものです。ついでながら次男には、これ
また父の恩人で時の有力官僚として知られていた江木千之先生のお名前
を、つけました。また僕の梓という名前は、同様父が敬愛し師事してお
りました早稲田の小野梓先生のお名前を、頂戴したものだそうです。

三島由紀夫も父の梓も、古市公威がどのような人物であったか、
よくは承知していなかった。古市は、一九二四年（大正一三年）
一月一四日に枢密顧問官に任ぜられ、一八九〇年（明治二三年）

九月九日このかた精励した貴族院議員を翌々一六日に辞任したた
けでなく、東京地下鉄道会社社長、金剛山電気鉄道会社取締役な
どの管理職から全て引退してしまつた。港湾協会副会長（会長は
内務大臣、もう一人の副会長は内務次官）、日本工学会理事、
日仏会館理事長のような碩学にふさわしい役職は辞任せず、死没
にいたるまで精励しているが、そのころ造船界の大御所などでは
決してない。古市は一八八六年（明治一一年）から九八年（明治
三一年）まで帝国大学の工科大学長であつたから、造船学科の教
授ににらみをきかすことはできたが、造船関係の業界にそそぐ余
力は生涯もちあわせなかつた。考えられることは、平岡定太郎が
大正三年に樺太庁長官を退任したのち、しかも第一次大戦ののち
南洋拓殖製糖社長に迎えられたころ、港湾協会の副会長であつた

古市公威に同郷の後輩として近づいたことくらいである。

同郷といっても、一八六三年（文久三年）に播磨国印南郡志方村の農家に生まれた平岡定太郎が神戸の乾行義塾、神戸師範学校をへて上京したころには、古市はフランス留学を終えて内務省土木局で出世コースを歩んでいた。定太郎は二松学舎、早稲田専門学校、開成学校、大学予備門をへて法科大学を卒業し、内務省に入り事務官として各地を転任した。一九〇六年（明治三九年）に西園寺内閣（第一次）が成立し、内務大臣の原敬が内務省に帰する山県有朋の閥族を退治しかけたとき、平岡定太郎は大府書記官から抜擢されて福島県知事となった。原は、後で述べるように、古市公威を山県の腹心として嫌っていたから、定太郎が古市のもとに出入りしていれば、抜擢されなかったであろう。古市は一八九八年（明治三二年）に技監、土木局長を辞任して内務省を去っており、定太郎が古市に近づいたのは、原敬が一九二二年（大正一〇年）になくなってから後のことと思われる。首相の原が反対するのをしりぞけて山県の推挙どおり古市に男爵が授かったのは八年の歳末ちかくのことであり、そのころ（大正一〇年から一四年にかけて）の古市は多くの顧問職、名誉職に精励しているから、近づくことは容易であつたらう。

三島の父である平岡梓は、父の定太郎、母の夏子に幼いころから、高級官僚になれと督励され、一高、東大法科で岸信介、我妻栄たちと競うこととなる。東大を卒業して農林省に入るが、岸のように栄進することはできなかった。一九四四年（昭和一九年）

中心となつて記念事業として東京大学構内に銅像を建設し、伝記を編集することになった。前者は一九三七年（昭和十二年）六月に完成し、後者すなわち『古市公威』は同年七月に刊行された。古市は最後の病床で、没後に伝記編集を申しでもものがあつても固く辞退せよと、長男に言いのこしていた。すなわち、

自分の死後、あるいは伝記編纂の企てがあるかも知れないが、自分は伝記を編纂される程の功績はない。近頃、多くの伝記が出版されるが、その真を得たものは、まことに少ないといふことだ。自分もそう感じることが少なくない。元來、仕事というものは一人でできるものではなく、多くの人々の力の依つて初めて成就するものであるから、それを一人でしたように書きたて、他人の功勞を没却せしめるようでは、後世を誤ることが甚だしい。しかも大抵の伝記はえて左様になりがちであつて、ことに甚だしいのは他人のした仕事が、その人のした仕事のように書かれたものすらある。自分の伝記の編纂の話が出た際は、固く御断りするように。

このよらかな事情があつたので、古市の門下は、なるだけ古市の遺志を傷けぬよう注意することを遺族と約束して、簡潔な伝記の編集に踏みきつたのであつた。私たちとして有難いのは、そのころ可能な限り、資料を集め、談話を聴きとつて編述されたことである。もし没後まもないころに公刊されなかつたならば、『古市公威』ほど正確な記述は非常に困難になつたであらう。重要な書簡、記録を残さなかつたと推察できる古市の場合、この『古市公威』から出発するより他に、探究の進路はないようである。

簡潔な伝記であるとはいつても、菊判四三八ページの要点を述

に平岡公威が学習院高等科を首席で卒業し恩賜の時計を拝受したとき、また東大法科を卒業し高等文官試験、大蔵省採用試験の難関を突破したとき、父の梓は多年の宿願を果して快哉を叫んだであらう。思うように出世できなかった祖父や父にかわつて、ぐんぐん出世し、祖父や父の競争相手の子や孫を追いぬくことは時間の問題であつた。しかしながら父のかたき、祖父のかたきを討ちとることを期待された平岡公威は、すでに早くから古市公威の出世コースを進もうとはしていなかった。そのことは、一九四八年（昭和二十三年）に大蔵省を退官してから後の三島由紀夫が、身をもつて示したことだから、あまりにも明瞭であり、蛇足を加えるに及ばない。もし平岡定太郎や梓が、古市公威の性格、業績を知っていたら、平岡公威を文学に走らせず有能な官僚に磨きあげるともできたであらう。できようが、できまいが、そんなことは平岡家以外の人々には重要問題でない。しかしながら古市公威の性格、業績が解明されていないと、日本の工学、産業、政治の歴史に暗い部分が残るであらう。暗い部分が残ることが、どれほど重要かどうかは、読者に判断していただくことにして、暗い部分に光をあてる努力をしておこうと思う。

古市公威は一九三四年（昭和九年）一月二十八日に、満八〇歳になんなんとして病没した。そのころは数えの八〇歳を祝うことが慣例で、前年の一月十六日には「御紋章付銀盃、酒肴料を下賜されただけでなく特に宮中杖を差許」された。古市に縁故のある学会、協会も祝賀を考えているうちに病没したので、日本工学会が

べるには紙面が足りない。ここでは年譜の形で整理して参考にしようと思ふ。古市公威と同年に生まれ、ともに内務省土木局で多くの業績を残した沖野忠雄についても並記したのは、兩者を比較することによって古市の特徴が鮮かに浮かびあがると考えたからである。

一八五四年（安政元年）閏七月二日、江戸の姫路藩中屋敷で古市公威が古市孝（孝錫）の嫡子として生まれた。幼名は兵庫郎造次、諱は孝爾であつたが後で公威と改めた。祖父の孝友は禄高二百石、中小姓組頭、先手物頭を勤め、足軽弓組を率いていた。同年の一月二日、沖野忠雄は、豊岡藩士沖野春水の嫡子として但馬国城崎郡大磯村で生まれた。

一八五五年（安政二年）、一〇月、安政の大地震にあつた。一八五八年（安政五年）、孝友が元締役として藩財政を掌るようになり、上屋敷に移る。

一八六一年（文久元年）、先代藩主酒井忠頭の子孫（稲若殿）の榎友として御相手を命ぜられたが、若殿は八か月のち三歳で病没した。このころ学問所で四書五経の素読、習字に精励。

一八六三年（文久三年）、一家をあげて姫路に移る。孝友が藩地の奉行となり四十石加増。藩校（好古堂）で国学、漢学、武芸に精励。国学寮教授の春山乙彦は、勝海舟から砲術学、航海学、兵学、築城学を習得し、蘭学、数学、天文学などに通じていたから、新しい学風を鼓吹した。

一八六五年（慶応三年）、一家をあげて江戸に移る。孝友は元締役として君側にはべり、公威は勤学生を命ぜられ、上屋敷の学問所で文武の修練に精励し頭角をあらわした。

一八六八年（明治元年）、姫路藩邸が朝廷に上納され、古市家も借家に移る。藩主（忠邦）に下屋敷が下賜、返却されたので、公威も護衛に選ばれて君側にはべり、勉学の余裕なし。歳末ちかく、父の孝より「学問を励め」と叱責されて発憤、柳川春之を訪ねて外国語の良師を求め、仏語に明るい辻理之助（後の辻新次）から初級英語を学習。この年の四月に江戸は征東軍に占領され、六月に幕府医学所は医学校として再建し西洋医学を、昌平饗は昌平学校として再建して漢学にあわせて皇学を授けることにし、さらに九月に開成所を復興して洋学を教えることにした。

一八六九年（明治二年）、一月に昌平学校、開成所が開校し、公威はただちに開成所に入学した。講習（地理、歴史、物理など）、語学（英語、仏語、後に独語を追加）、数学の三課を学修したが、語学は仏語を選択した。そのころの明治政府が直轄したのは昌平学校、医学校、開成所の三校であったが、それぞれ独立し、相互の連絡なく、統一がとれていなかった。そこで昌平学校を大学校と改称、三校一体の中心にしようとし、民部卿兼大藏卿の松平慶永が大学別当を兼任して指導にあたった。漢学派と国学派とが対立し、前者が後者を圧倒していた。一二月に大学校を大学、開成所を大学南校、医学校を大学東校と改称し、統一整備に着手した。すなわち、

一八七〇年（明治三年）、二月に大学規則が制定され、学制、賞法、試法、学費、学科の六項が公示された。学体では皇学、漢学、洋学が協力し、五箇条御誓文にあるように「天地の公道に基き広く知識を世界に求め」て聖旨にそうことを要求した。学科では、教科、法科、理科、医科、文科の五科に分け、皇学、漢学、洋学の呼称を止めて、これらの一者を偏重することを避けた。また賞法では、二〇歳以下、一六歳を限り、地方の考課をへて、知事が証憑をあたえて釐下に貢進したものが、大学生に補充されると定めた。国学派、漢学派の教官の対立は解消したが、教育にあたる教官と新しい大学規則をしいる教育行政官とが衝突して混乱し、松平別当は辞意をかためたため、政府は七月に大学本校を閉鎖することになった。そこで賞法で定めた貢進生の制度が、まず大学南校について実施されたのであった。すなわち七月に、太政官は全国各藩に令達して、現在十五万石以上の大藩は三人、五万石以上の中藩は二人、五万石以下の小藩は一人を限り、年齢一六歳以上二〇歳までの人材を選抜し、来年一〇月を期として大学南校に貢進せよ、と述べた。姫路藩は中藩として二名を選抜することとなり、藩主の酒井忠邦から命ぜられて藩評議員の石本綱（陸軍大佐）が選抜を担当した。父の孝がようやく家督を相続し公威をつれて上京していたが、公威は、在京し勉学に精励する秀才一七名のなかから石本新六とともに貢進生に選抜された。

〔石本新六は綱の弟であるが、一八七三年（明治六年）に陸軍幼年学校に転じ、やがて西南戦争に従軍し、士官生徒第一期の秀才として金沢

藩出身の木越安綱とともに栄進したから、石本綱の選抜にくるいはなかったと賞讃された。石本新六はフランスに留学して工兵団の指導者となり、寺内正毅（日露戦争前後の陸軍大臣）を助けて陸軍次官として軍政をにぎり、西園寺内閣（第一次）の陸軍大臣となり、明治四五四月に現職で病没した。そのあとを継いだのは、フランスに留学した後輩の上原勇作（日向藩出身、士官生徒第三期、野津道貫元帥の女婿）であった。木越安綱はドイツ流に再編するにあたっただけでなく、桂の幕僚として日本陸軍をドイツ流に習学し、ついで旅団長、師団長として野戦の軍功も卓抜なものがあつた。西園寺内閣（第一次）のあと桂内閣（第三次）から求められて第一師団長から陸軍大臣となった木越は、藩閥政治打倒の世論で桂内閣が倒れたあと山本権兵衛内閣に留任し、陸軍の反対を押しきって陸海軍大臣現役武官制を改め、予備役の大将、中将が大臣になる道を開いた。このため、陸軍の大御所である山県有朋だけでなく長谷川好道（参謀総長）、田中義一（前軍務局長、宇垣一成（軍事課長）を激怒させ、たちまちに休職に追いやられて、一九二四年（大正九年）五月から一九三二年（昭和七年）三月の死没まで貴族院議員として陸軍の暴走を傍観したのであった。現役の大将、中将しか陸海軍大臣になれないことに再び改められたのは、昭和一年五月のこと、二・二六事件を処理する齋軍の成果といわれたが、挙軍亡國の方針を決定したと見るべきであらう。

なお、沖野忠雄は、豊岡藩からのただ一名の貢進生として大学南校に入り、古市公威との雁行が始まる。

大学南校では、前身の開成所と同様に、講習、語学、数学の三科に分かれていた。生徒の等級は、初等、八等、七等、六等、五等（以上が普通科）、四等、三等、二等、一等（以上が専門科）

があり、専門科は法科、理科、文科に分かれたが、まだ専門科は設けられず公威は普通科上級に編入された。語学で分けると英語が二一九人、仏語が七四人、独語が一七人で、公威は仏語学修者のなかで頭角をあらわしていた。

一八七一年（明治四年）、七月に廃藩置県が断行され、学制も改変された。すなわち閉鎖中の大学本校が廃止されて文部省が設置され、大学南校は南校、大学東校は東校と改称されて文部省に管轄されることとなった。九月に南校、東校ともに閉鎖され、諸藩の貢進生制度も廃止され、三一〇名の貢進生も退学を命ぜられた。一〇月に改めて選抜された四四〇余人が南校に入学を許され、公威は再び仏語学修者として、フランス人教師の厳しい教育を受けることとなった。

一八七二年（明治五年）、八月に文部省は全国を八大学区に分け、大学区をさらに中学区、小学区に分け、各区に一学校をおくことに決定した。そこで南校は第一大学区第一番中学と改称された。中学は上等、下等に分かれ、公威は上等中学生となった。

一八七三年（明治六年）、ようやく上等中学生の卒業が迫ったのにもかかわらず、卒業生を取容する大学は未設であった。そこで文部省は第一番中学を開成学校と改称したが、大学でもない中学でもない専門学校ということになった。専門学校とは外国人教師が教授する高等な学校で、法学校、医学校、獣医学校、理学校、諸芸学校、鉱山学校、農学校、商学校などが考えられた。さしあたり開成学校では法学、化学、工業学、諸芸学、鉱山学の五科を

設けたが、経費の都合で語学は英語ということになり、仏語、独語学修者も英語への転科が計られた。転科しにくい上級生に対する便法として仏語生徒は諸芸学科、独語生徒は鉱山学科に入ることとなった。

八月に開成学校の新しい校舎が完成し、一〇月の開業式には天皇が臨幸した。このとき公威を含む八人の秀才が選ばれて御前で講演、実験をした。

一八七四年（明治七年）、五月に文部省は開成学校を東京開成学校と改称したが、名称だけの変更であった。生徒は官立の大学校として唯一最高の学府であることを誇っていたが、学業、行動でリーダーとなったのは、法学科の齋藤修一郎、小村寿太郎、化学科の長谷川芳之助、鉱山学科の安東清人、諸芸学科の古市公威の五人組であったといわれる。東京開成学校の校長心得であった浜尾新はそのころから、古市の才能を高く評価していた。

そのころ、政府も諸藩も海外に留学生を送ったが、廃藩置県によって留学生の学費は政府支出を求めようになつた。また留学生の人物、学力も好ましくないものがあつたので、六年一月に官費留学生を全廃して出なおすことになつた。そこで前述の五人組が盛んに運動して、新しい海外留学生制度の実現を催促した。

一八七五年（明治八年）、五月に文部省は貸費留学生規則を制定し、留学志望者を試験で厳選して海外派遣することを発表した。七月に最高学府の東京開成学校生徒から次の一名が選抜されて留学することとなった。これは文部省の第一回留学生と呼ばれる

ものである。

英語の法学科 本科下級生の三浦（鳩山）和夫、小村寿太郎、齋藤修一郎、菊池武夫

英語の化学科 本科下級生の松井直吉、長谷川芳之助、南部球吾

英語の工学科 本科下級生の平井晴次郎、原口要
仏語の諸芸学科 予科第一級生の古市公威

独語の鉱山学科 予科第一級生の安東清人

古市の才能を愛惜した東京開成学校のマイヨ教授は、古市に競争試験で実力を発揮してエコール・サントラルに入学することと、帰国して日本にエコール・サントラルに匹敵する大学を建設することを期待したといわれる。古市の横浜出発に先だつてマイヨ教授は病没したが、古市はその期待を次々に実現していった。エコール・サントラルの予備門であるエコール・モンジュで一年間みっちり勉強した。

一八七六年（明治九年）、古市は七月にエコール・モンジュを卒業して、ただちにエコール・サントラルの入学試験を受けた。約一〇〇〇名の志願者のうち約三〇〇名が入学を許可されたが、第三位の好成绩で古市は難関を突破したのであった。このとき、文部省の第二回留学生に選抜された沖野忠雄も、古市とともにエコール・サントラルに入学を許可された。

一八七九年（明治十二年）、八月に古市も沖野もエコール・サントラルを無事に卒業し、工学士の学位を授けられた。とくに古

に沖野忠雄が土木局に入り、職工学校は兼務となり、翌年四月に兼務を辞任した。

一八八四年（明治一七年）、九月に豊平川の改修工事は完成した。三月に古市は新潟、富山、石川、福島、長野、岐阜六県における直轄工事（信濃川、阿賀野川、庄川）の監督を命ぜられた。六月に沖野は静岡、山梨、長野三県における直轄工事（富士川）の監督を命ぜられた。

一八八六年（明治一九年）、五月に工科大学教授、工科大学長の兼任を命ぜられ、新潟から東京へ移り土木局勤務となる。河川の運河、港湾工学の講義、工科大学全体の整備、統制を担当することとなった。帝国大学の開設にともない、東京大学工芸学部と工部大学校を統合して新しい工科大学を建設する大役は、古市以外に適任がなかった。心ならずも土木工事の現場をはなれて土木行政の体制整備と、土木工学の教育、工科大学の充実の責任をとることとなったが、三二歳だった古市は以後一二年間、この重責を負うこととなる。古市に代わって沖野は新潟、富山、石川、福島、長野、岐阜六県の直轄工事の監督を命ぜられた。重要な土木工事の設計、監督を確実にするため、古市はかねてフランスの制度にならって土木監督署の設置を提案していたが、七月に土木監督署官制が制定され実現した。すなわち、全国を六区に分けて監督署をおき、府県土木工事の監督と政府直轄工事を管掌させることとなり、内務省技師は巡視長、巡視として配属された。そこで沖野は第三区（新潟）土木監督署に勤務する巡視長を命ぜられた。

市の卒業成績は第二位ということでバリの話題となった。フランス人であれば名門校の折紙つきの秀才として輝かしい将来が約束されているのであるから、東洋の小国からやってきた青年の秀才ぶりは衆目をひくのに十分であった。古市はさらに文部省に留学の一年延期を願ひいで、一月にソルボンヌ大学理科に入学し、数学、天文学を学習した。沖野はさらに二年間みっちり、実地の研修をすることになった。

一八八〇年（明治一三年）、七月に古市は優秀な成績でソルボンヌ大学を卒業し、理学士の学位を授けられた。一〇月に帰国し、一月に内務省土木局の雇を拜命した。月俸は二二〇円であったが、当時の工部大学校卒業生の初任給は一等三〇〇円、二等二五円であった。

一八八一年（明治一四年）、一〇月に東京大学理学部講師を兼任して数学を担当した。そのころ古市は日本最高の数学者であった。沖野はフランス留学を終えて五月に帰国し、七月に職工学校（のちの東京工業大学）雇を拜命した。月俸一〇〇円であった。

一八八二年（明治一五年）、土木局における河川、港湾関係の作業が忙しくなったため、一月に東京大学講師を辞任し、以後は土木局直轄工事の監督に専心することとなった。四月、五月の暴風雨によって豊平川が氾濫し札幌で激甚水害がおこり、山田頭義（内務卿）に随行して実地調査を行なった。

一八八三年（明治一六年）、二月に豊平川改修計画を内務卿に提出し、六月に再び実地調査し堤防、水門工事に着手した。八月

一八八七年(明治二〇年)、四月に沖野は第二区(仙台)巡視長の兼務を命ぜられ、北上川改修と取組むこととなった。
 一八八八年(明治二一年)、五月に古市は工学博士の学位を授けられた。一月に山県有朋(内務大臣、陸軍中将)のヨーロッパ視察の首席随員を命ぜられた。ヨーロッパ視察の間、工科大学長を辞任した。

一八八九年(明治二二年)、九月に帰国し、再び工科大学長に任ぜられた。沖野は第四区(大阪)土木監督署巡視長を命ぜられ、淀川、木曾川改修と取組むこととなった。

一八九〇年(明治二三年)、六月に古市は土木局長に任ぜられ、土木監督署制度を強化するため八月に官制を改定した。巡視長は署長と改称されて、沖野は第四区(大阪)署長兼第五区(広島)、第六区(久留米)署長を命ぜられた。

一八九一年(明治二四年)、八月に沖野は工学博士の学位を授けられた。なお沖野は、同月には第五区、第六区署長の兼任を解かれた。

一八九四年(明治二七年)、六月に古市は土木技監に任ぜられた(土木局長の後任は都築馨六)。

一八九六年(明治二九年)、二月に古市は土木局長兼任を命ぜられた。三月に沖野は第五区(大阪)土木監督署長兼第四区(名古屋)土木監督署長を命ぜられた。

一八九七年(明治三〇年)、三月より一月にかけて足尾銅山鉱毒事件調査委員を命ぜられる。古市は工科大学長としてなすべ

きをなしたとして、浜尾新(帝国大学総長)に工科大学長の辞意をもらすが阻止された。六月に京都帝国大学が創立されることとなり、帝国大学は東京帝国大学と改称された。一月に浜尾に代わって外山正一が総長に任ぜられた。六月に沖野は石黒五十二とともに土木監督署技監に任ぜられた。

一八九八年(明治三一年)、四月に外山が辞任し、五月に菊池

大麓が東京帝大総長に任ぜられた。そこで七月に古市は工科大学長を辞任したが、後任の辰野金吾は古市の方針を踏襲した。古市は板垣退助(内務大臣)の慰留をしりぞけて、同時に技監、土木局長をも辞任した。後進に道を開くといったが、そのうち技官が土木局長となることはなく、技官の最高職として設けられた技監も廃止された。第一区(東京)、第二区(仙台)、第三区(新潟)署長の石黒五十二が一月に退任して海軍技監となったので、古市の辞任によって沖野ははからずも土木局技官の首座をしめたが、

一月に土木監督署技監は廃止された。六月に成立した大隈内閣は一月に崩壊し、山県内閣(第二次)が成立し、古市は通信次官に任ぜられ、つづいて鉄道局長心得を兼任した。

一九〇〇年(明治三三年)、古市は五月に通信省総務長官兼逓信省官房長に任ぜられ、一月に官房長、次官を次々に辞任した。一九〇二年(明治三五年)、六月に製鉄事業調査委員長を嘱託された。

一九〇三年(明治三六年)、三月に鉄道作業局長官に任ぜられた。一月に鉄道作業局長官を休職となり、京釜鉄道株式会社総

裁に就任した。

一九〇四年(明治三七年)、朝鮮にあつて京釜鉄道の速成を指導し一月に完成する。

一九〇五年(明治三八年)、一月に京釜鉄道全線が営業を開始した。一月に東亜鉄道研究会の理事長に就任した。二月に鉄道作業局長官の休職が満期となる。古市の去つた土木局では四月に土木監督署が廃止され土木出張所が設置された。府県土木は土木局が直接監督し、土木出張所は、直轄河川改修の実施、調査を担当することとなった。沖野は大阪土木出張所長に任ぜられた。

一九〇六年(明治三九年)、四月に日露戦争の功勞によつて古市は勲一等、沖野は勲二等瑞宝章を授与された。六月に古市は統監府鉄道管理長官に任ぜられた。

一九〇七年(明治四〇年)、六月に統監府鉄道管理長官を辞任して帰国した。

一九〇九年(明治四二年)、八月に東亜興業株式会社社長に就任した。

一九一〇年(明治四三年)、一〇月に古市、沖野ともに臨時治水調査委員に任ぜられた。

一九一一年(明治四四年)、四月に沖野は内務技監に任ぜられ、大阪から東京へ移つた。

一九一四年(大正三年)、一二月に土木学会が創立された。

一九一五年(大正四年)、一月に古市が土木学会長(第一代)に当選し就任した。

一九一六年(大正五年)、一月に沖野が土木学会長(第二代)に当選し就任した。

一九一八年(大正七年)、七月に沖野が内務技監を辞任した。後任の原田貞吉は沖野を助けて深く信頼されていた。

一九一九年(大正八年)、一二月に古市は男爵を授与された。

一九二一年(大正一〇年)、三月に沖野が死去した(六七歳)。

一九二四年(大正一三年)、一月に清浦奎吾が首相となつて枢密院議長を辞任し、副議長の浜尾新が議長に就任した。古市は枢密顧問官に推薦され、貴族院議員を辞任した。

一九三四年(昭和九年)、一月に古市は死去し、旭日桐花大綬章を授与された(八〇歳)。

古市公威は幼少より文武両道に励み、学生時代は衆望をになつてリーダーとなつたが、段々に謹厳な学究となつた。ついで内務省土木局と帝国大学工科大学にあつて、近代的な体制整備にいそしんだが、後輩、門下による閥族をつくることを避けた。そのため、四四歳で土木局、工科大学を去つたのちの多彩な業績は、自ら詳しく語らないためもあつて、淡々たる隠居仕事のように見られがちであつた。しかしながら、古市の業績は山県有朋とその閥族につなげてみて正当に評価されるものではなからうか。古市が山県から信頼されて働いた業績を、山県も古市もあえて語らなかつたことこそ、相互の信頼が非常に深かつたことを証示するものである。

古市が内務省土木局にあって、内務卿、内務大臣の山田顕義、山県有朋から有為の人材として着目されたことは、多くの人々に承認されるであろう。とくに山県は、一八八三年(明治一六年)一月から一八九〇年(明治二三年)五月まで上司として古市に注目し、類例のない異常な抜擢と昇任とを行なっていることを追跡したい。古市は使えば使うほど、役に立つことが明瞭になったと考えられる。その最も顕著な事例は一八八八年(明治二一年)から翌年にかけてのヨーロッパ視察である。国会開設に備えて、地方自治制の確立を先取りするために山県は異常な努力を傾注した。それは自由民権運動の制圧の場合にも劣らぬ熱心さであった。視察旅行には、内務省から古市公威(技師)、荒川邦藏(書記官)、寺崎遜(属)、中山寛六郎(秘書官)、陸軍省から平佐是純(騎兵中佐)、中村雄次郎(砲兵少佐)、小阪千尋(歩兵少佐)、賀古鶴所(軍医)が随行したほか、フランスに駐在する外務参事官の都築馨六(井上馨の女婿)を内務参事官にとりたてて随員に加えた。表向きの外交には都築が当たったが、フランスの要人との対談には、フランスの名門校エコール・サントラルの秀才としてきこえた古市が望外の成果をあげた。帰国の翌年、技官に与えられることになかった土木局長に古市が任ぜられ、さらに最初の勅選議員として貴族院に送りこまれた抜擢は、どのように評価しても大きすぎはしないであろう。長州出身でドイツ留学した荒川邦藏は、帰国の翌年に衛生局長に昇進する(後藤新平は当時その下僚にすぎない)。三二歳の都築馨六が一八九四年(明治二七年)から九六年

にかけ、長州出身の内務大臣の井上馨、野村靖のもとで土木局長に就任するのも、古市の諒解あつての人事と思われる。長州出身でフランス留学した小坂千尋は、瞩目されながら帰国の翌年に病没し、代わって伊勢出身でフランス留学した中村雄次郎が抜擢され、陸軍次官、製鉄所長官、貴族院議員、男爵、満鉄総裁、関東都督(現役復帰)、宮内大臣、枢密顧問官などを歴任したが、これほど山県のために献身したものもないほどである。古市が一九〇二年(明治三五年)に製鉄事業調査委員長として製鉄所長官の中村を助けたのも、古市が中村を製鉄所長官に推したからである。浜松出身の賀古鶴所は、ヨーロッパ視察に随行してベルリンで耳鼻咽喉科を研修し、日本における最初の専門医となったほかにも日本の医学史上に特記される業績があるが、和歌を愛し多くの人から親しまれた野趣の大人で、山県が虚心に国事を論ずることのできる相手でもあった。一八八一年(明治一四年)に東京大学医科を森鷗外とともに卒業したが七歳年長で、鷗外にとって生涯の親友であり臨終にも立会っている。もし賀古がいなければ、鷗外は軍医総監、医務局長に栄進できなかったであろう。

山県にとつてはこのヨーロッパ視察は一八年ぶりであり、古市にとつては八年ぶりであった。それぞれに学びとつたことは、私たちの想像以上に大きい。山県は、地方自治制の研究におとらず、日清戦争に備える対策に腐心している。武將としても宰相としても、なつかしまれる人物では決してないが、木戸孝允、大久保利

通役後の明治政府にとつて、伊藤博文とともに不可欠のリーダーであった。伊藤は時勢の変化に柔軟に対応して才腕をふるったが、山県は有能な人材を組織して閥族を形成し権力をかためた。陸軍、内務省、司法省で山県の子分といわれる豪傑を数えたるのも結構であるが、古市公威や賀古鶴所のように大言壮語しない紳士の目立たない役割も見落してならないであろう。

山県は一八九四年(明治二七年)に第一軍司令官を解任されて鴨緑江岸の陣営を去るとき、明治天皇にあてて次のような意見書をしたためていた。朝鮮を南北に貫く釜山―義州鉄道は、東アジアへ通じる幹線であり、これを延長して中国、インドに達する幹線を確保しないと、帝国主義列強と東アジアの覇権を争うことは不可能になるであろう、と。山県の氣持を痛いほど解理していた古市が、緊迫する日露戦争を予感して土木局、工科大学を去り、釜山―義州鉄道の速成をかってたことを、私たちは凝視したのである。田辺朝朗は列強の鉄道政策を高く論議したり、一八九九年(明治三二年)に工科大学校での旧師ダイエルをイギリスに訪ねるときも山県有朋にシベリア鉄道の軍事探偵的調査をしてこようと申しでたりしているが、それに数倍する情熱をもちながら古市は、黙々と所信に邁進したのである。五〇歳をすぎた古市が、生活の不便もかえりみず、荒らくれ人夫とともに鉄道工事に全力をそそいだ心中は、未来論やコンピュータをくいのものにして肥満する大学教授にはとうていうかがいえないであろう。日露戦争が終わり、速成の軍用鉄道を改良し、朝鮮全土の鉄道計画

の基礎をかためてから静かに帰国した古市の功勞は、武勲を誇りつつ凱旋した將軍などの及ぶところではない。兒玉源太郎から満鉄総裁として出馬を請われたとき、古市は、適材ではないと固辞して、後藤新平を推薦した。後藤は台湾総督の兒玉から抜擢され、明治十一年から三十九年にかけて民政局長、民政長官として治績をあげ、三十九年四月に男爵を授けられたばかりであった。内務省で後藤の奇才をじっくり眺めていた古市は、山県よりも伊藤よりも後藤の使い方を承知していただけでなく、戦地、植民地における日本の軍人、官僚、商人の蛮行に辟易していたからである。そうして、終生、中国における鉄道敷設に心くだいたことは、詳細に述べたて必要はもはや無用である。

最後にささやかな妄想を書きそえておく。私には、平岡定太郎が古市に近づいたとき、その機会をとらえて古市が平岡から多くのことを聴きとつたと思われてならない。日露戦争で樺太が領土となり、一九〇七年(明治四〇年)に樺太庁が設置されて、樺太守備隊司令官の楠瀬幸彦(陸軍少将)が樺太庁長官を兼任し、勅任事務官の熊谷喜一郎が民政長官となったが、台湾総督の兒玉源太郎と民政長官の後藤新平のようにうまくはいかなかった。それどころか醜悪な口論がくりかえされ、内務大臣の原敬が喧嘩両成敗にして、楠瀬より五歳も若い福島県知事の平岡定太郎を樺太庁長官にすえたのであった。平岡梓は、父の定太郎を酒よし女よしの豪傑でトリップルにとつつかれていたらうと述べているが、原

の人事によって樺太の民心が初めて落ちついたと好評をうけたのであった。新しい領土への移住者には食いつめた無頼漢もいたりしたが、平岡は威張らぬ感じのいい長官とうつつた。楠瀬や熊谷は人間として多大の欠陥をもっていた。楠瀬は上原勇作とともに四年もフランス留学した砲兵将校であるが、京城公使館付のとき関后殺害事件で入獄したり、そののち、台湾總督府参謀のときはヒリッピン侵略を策謀したりしている。公使の三浦梧楼（予備役陸軍中将）の命令によって楠瀬中佐の指揮する守備隊が朝鮮王宮で犯した蛮行について、当時の外務次官であった原敬は京城にでかけて調査していたから、陸軍大臣の寺内正毅に迫って楠瀬を樺太から追放することをためらわなかった。とりあえず地方局長の床次竹二郎に樺太庁長官を兼任させ、ついで平岡定太郎を専任の長官としたのであった。したがって原の平岡に対する期待は並々でなかったし、また平岡はそのような期待にまずまずこたえたと見えよう。内閣のかわるたびに地方官の大規模な移動が行なわれ、汚職官僚や無能官僚が次々に淘汰されたにもかかわらず、平岡は留任したからである。

平岡は、樺太に六年も在勤し、部下の事故を機会に退官した。後任の岡田文治は、二年四か月で警視總監となり、ついで貴族院の勅選議員を二五年も続けた。したがって、岡田に比較して、平岡は不運をかこつことになるのであるが、古市にとっては平岡の樺太における飾らない見聞が有用であった。古市は一九一五年の土木学会長講演で、これからの戦争は総力戦であることを見ぬい

て第一次大戦におけるヨーロッパを論評しており、またフランスなどの植民地統治にも関心を深めていた。山県が頭をさげて出馬を請わなくとも、古市は山県の歴史的役割を見ぬいて、虚心に声援したのである。

山県の閩族政治がいくく、したがって山県の腹心の古市を嫌った原敬には、古市がどのように有用な人材か評価できなかった。原は政友会の勢力を強引に拡大するために、露骨な鉄道政策を展開した。原は「党勢拡張のため鉄道を引いてやるのではない。鉄道を引いてやると、その地方の住民が我々に共鳴して党勢が拡大するのだ」とうそぶいた。鉄道路線の無謀な新線計画が続出し、現在もなお赤字路線の建設がつづいているのは、原敬によって口火を切られた我田引鉄政策の党争によるものである。原はまた、内務省の警察官僚の山県につながる閩族を一掃したが、土木官僚を大きく動かすことはできなかった。古市公威と沖野忠雄のきずいた土木行政には、鉄道政策の場合のように斬りこむことができなかったのである。山県有朋が内務省を掌握し、鞭（警察行政）と鉛（土木行政）とをもって人民に臨んだといわれるが、このような方針を古市は早くから理解していたのである。山県が鉛の効能を理解できないような暗愚であったなら、古市を重用したりはしなかったであろう。